代助が大胆な決断を選択した背景

―『それから』の表現から代助の思考の癖を探る ―

李　種　恩・柳　澤　浩　哉

The way in thought process of DAISUKE

― A study on the expression of "SOREKARA" ―

Jong-Eun LEE, Hiroya YANAGISAWA

キーワード：『それから』，表現，人物造形，思考の癖，二分法

1．課題設定

『それから』は，裕福な家庭に育ち高等教育を受けたにもかかわらず，社会に出ず「高等遊民」を続ける代助が，友人（平岡）の妻三千代を奪い取るまでの物語である。代助は，それまで積極的な決断や行動を避け続けてきたように見えるから，人妻を奪うという決断はあまりに大胆に見える。もちろん，それによって経済的支えや家族関係の全てを失うことを承知の上で，代助はその決断をしている。本稿は，『それから』の表現に注目することによって，推論形式と推論データの両方において代助が独特の癖を持っていることを明らかにし，そこから大胆な決断をするに至った背景を明らかにしてみたい。具体的に提案するのは次の三点である。(1) 代助の決断の背景には，二者択一という思考の癖が存在している。(2) 代助は推論の手がかりに過去の事実を使わない傾向がある。(3) 代助にとって三千代は過去を呼び覚ます存在である。

本稿のように表現を手がかりに文学作品の分析を試みた研究は少なくない（このような研究を表現研究と呼ぶことにしよう）。だが，表現研究の大半は作品の読みに対して新たな見解を提出することなく，既存の作品論・人物論の追認に甘んじてしまう。例えば，「このような表現が，作品世界を演出している，人物の性格を的確に伝えている，作者の感性を凝縮している……」といった漠然とした結論で締めくくられ，読みに対する影響を残せないまま考察を終えるのである。だが，表現に使用者の個性を露わにする鍵が潜んでいることは言うまでもなく，表現研究は作品の読みを新たにする可能性を秘めた方法のはずである。

従来の表現研究が読みに対する影響を残せずに終わってしまう原因は，表現に対する認識不足にある。表現研究に必要なのは，その表現から何が分かるかという見通しのはずだが，多くの研究がその見通しを欠いたまま強引に「分析作業」を行っているからである。無手勝流に表現を取り上げて調べてみても，そこから読みに影響するような結論を引き出すことは難しい。その一方で，的確な分析に成功した研究は，表現形式に対する明確かつ客観的な認識から出発している。例えば，立論形式の混乱からラスコーリニコフの動揺を明らかにした『罪と罰』に対する香西秀信氏の研究，あるいは屈折系の接続詞の多用から李徴の思考の癖を導き出した『山月記』に対する長尾高明氏の研究などがそれである[1]。

表現形式に注目することによって導き出せるものは何か。『それから』の分析を進めるにあたって，まずこの点の確認を行っておきたい。その典型は発想の傾向・思考の癖である。これはトポス論の開拓者として知られるアメリカの修辞学者リチャード・ウィーバーが唱え続けてきたアイデアで，彼は論者が用いる立論形式から，その人物の発想の傾向を知るという方法を提案し実行している[2]。

本稿では，代助に典型的な推論立論形式あるいは立論形式を取り出すことで，代助の思考の癖を抽出してみたい。ウィーバーは古典修辞学のトポス論を根拠に話者の思考の癖を浮かび上がらせたが，本稿では立論形式の範囲をより広く設定することで，代助の思考の癖を柔軟に把握したい。さらに本稿では，推論データの選択傾向にも注目して，その点に対する代助の癖も明らかにする。また，必要に応じて，文法形式や修辞技法も視野に入れてみたい。

2．代助の思考の癖（1）：二分法

2.1．二分法という癖

まず，代助の思考法から考えてみよう。代助には

二つの選択肢を提示した上で思考を進める傾向がある。

次の例は，金の無心を断られた代助が，兄がなぜ要求を断わったのか，断わりの動機を推測している箇所である。なお，この時代助は三千代から金策を依頼されており，兄への金の無心は三千代に渡すためのものである。傍線部で代助は，兄が断った理由を二者択一の形で推測している。ただし，二つの選択肢を提示した代助は，それ以上推論を進めることなくこの問題の考察を止めてしまう。

（ア）

斯う考へた様なものゝ，別に兄を不人情と思ふ気は起らなかつた。寧ろその方が当然であると悟つた。此兄が自分の放蕩費を苦情も云はずに弁償して呉れた事があるんだから可笑しい。そんなら自分が今茲で平岡の為に判を押して，連借でもしたら，何うするだらう。矢っ張り彼の時の様に奇麗に片付けて呉れるだらうか。兄は其所迄考へてゐて，断わつたんだらうか。或は自分がそんな無理な事はしないものと初から安心して貸さないのかしらん。

次の例は，三千代が花器の水を飲んでしまったことについて考えるくだりである。代助を尋ねてきた三千代は喉の渇きに耐えられず，代助が水を準備している間に，鈴蘭の生けてあった花器の水を飲んでしまう。その動機を代助は二分法で考える。

（イ）

代助は黙つて椅子へ腰を卸した。果して詩の為に鉢の水を呑んだのか，又は生理上の作用に促がされて飲んだのか，追窮する勇気も出なかつた。よし前者とした所で，詩を衒つて，小説の真似なぞをした受売の所作とは認められなかつたからである。そこで，たゞ，「気分はもう好くなりましたか」と聞いた。

（イ）のポイントは，三千代の行動に呆れて質問する気にもならなかったということだが，それを言うために，「詩の為に鉢の水を呑んだのか」と「生理上の作用に促がされて飲んだのか」という二つの選択肢を提示している点に注意したい。

次の例は文筆で生計を立てている寺尾と会食した日の晩，自分が寺尾のように文筆で生きていけるか自問する場面である。代助はこの時，自分には寺尾のような生き方のできないこと，すなわち独りでは生きられないことが分かっているのだが，その結論を導くために二つの選択肢を提示して思考を進めている。

（ウ）

代助は其晩自分の前途をひどく気に掛けた。もし父から物質的に供給の道を鎖された時，彼は果して第二の寺尾になり得る決心があるだらうかを疑つた。もし筆を執つて寺尾の真似さへ出来なかつたなら，彼は当然餓死すべきである。もし筆を執らなかつたら，彼は何をする能力があるだらう。

自分が自活できないことは明らかなのに，ストレートに結論を出さず，「筆を執つて」「筆を執らなかつたら」という二分法を使っている点に代助の特徴が認められる。

（エ）も結論の前に二つの選択肢が提示されている例である。嫂に金の工面を頼むしかないことが結論であるが，この結論を出す前に，金を必要とする事情を三千代に詳しく聞くという選択肢が提示されている。三千代に尋ねるという後者の選択肢は簡単に否定されるが，この選択肢の否定においても二つの選択肢が提示されている。すなわち，二つの選択肢を提示し，二つをともに否定することによって三千代に聞く可能性が否定されるのである。

（エ）

代助はもう一返嫂に相談して，此間の金を調達する工面をして見やうかと思つた。又三千代に逢つて，もう少し立ち入つた事情を委しく聞いて見やうかと思つた。

けれども，平岡へ行つた所で，三千代が無暗に洗ひ浚い饒舌り散らす女ではなし，よしんば何うして，そんな金が要る様になつたかの事情を，詳しく聞き得たにした所で，夫婦の腹の中なんぞは容易に探られる訳のものではない。

これらの用例は，「ＡかＢか」という二つの選択肢を提示しながら思考を進める癖が，代助にあることを示している。提示される選択肢の数は三つでもそれ以上でも可能なはずだが，代助が提示する選択肢は常に二つである。二分法で考える癖とまとめていいだろう。

2.2. 決断させる二分法

考えるばかりで積極的に動けない前半の代助と，平岡から三千代を奪い取る後半の代助は，あまりにかけ離れているようにも見える。だが，消極的な代助も大胆な代助も，どちらも二分法という思考の癖が背景にある。決断しないのは二つの選択肢が拮抗している時，行動するのは一方の選択肢が選ばれた時だからである。

では，代助はどのような思考を経て三千代を奪う結論に到達したのか。この思考のプロセスを追いながら，二分法と大胆な決断の関係を確認してみたい。

代助は，三千代と自分との間にあった「愛の炎」を自覚した瞬間，三千代を「略奪」すべきことを確信するのだが，すぐには結論を出すことができなかった。この時，代助は父から知人の娘との縁談を勧められていたからである。代助は父の勧める縁談を受け入れるか，縁談を断って三千代を奪うかという二者択一に悩み続けてしまう。

まず，代助はこの二者択一が，中途半端の状態の許されない，どちらか一方を選ぶべき関係であることを自覚する。（オ）がその箇所である。

（オ）

此所で彼は一のヂレンマに達した。彼は自分と三千代との関係を，直線的に自然の命ずる通り発展させるか，又は全然其反対に出て，何も知らぬ昔に返るか。何方かにしなければ生活の意義を失つたものと等しいと考へた。其他のあらゆる中途半端の方法は，偽に始つて，偽に終るより外に道はない。悉く社会的に安全であつて，悉く自己に対して無能無力である。と考へた。

代助はそれまで，二つの選択肢を提示しても一方を選びとることはほとんどなかったから，このような状況に自分を追い込むのは彼にとって画期的なことである。ただし，三千代と自分との「愛の炎」を自覚したにもかかわらず，（オ）の段階では二つの選択肢はほとんど対等であったと読める。彼が二つの選択肢の間で揺れていたことは次の（カ）と（キ）から確認できる。（カ）における「天意には叶ふが，人の掟に背く恋」は縁談を断って三千代を選ぶこと，「三千代と永遠の隔離」は縁談を受け入れることを指す。

（カ）

天意には叶ふが，人の掟に背く恋は，其恋の主の死によつて，始めて社会から認められるのが常であつた。彼は万一の悲劇を二人の間に描いて，覚えず慄然とした。

彼は又反対に，三千代と永遠の隔離を想像して見た。其時は天意に従ふ代りに，自己の意志に殉する人にならなければ済まなかつた。（中略）そうして，この結婚を肯う事が，凡ての関係を新にするものと考えた。

（カ）を見ると，わずかながら縁談受け入れの方が選びやすい選択肢であったと読める。だが，この直後に代助は二つの選択肢を（キ）次のように言い換えている。代助は二つの選択肢の間で揺れ動いているのだ。

（キ）

自然の児にならうか，又意志の人にならうかと代助は迷つた。

二つの選択肢が対等の重みであれば，一方を選ぶことは不可能である。この後一週間の間代助はこの問題を考え続ける。その間，代助の体はストレスから変調をきたし，「睡眠の不足と，それから，脳の屈託とで，排泄機能に変化を起こした」という。その後，代助の意識は（ク）の段階に進む。

（ク）

賽を手に持つ以上は，又賽が投げられ可く作られたる以上は，賽の目を極めるものは自分以外にあらう筈はなかつた。代助は，最後の権威は自己にあるものと，腹のうちで定めた。父も兄も嫂も平岡も，決断の地平線上には出て来なかつた。

「略奪」を決意する一歩手前の段階である。ここでも二分法的な思考の痕跡を読み取れることに注意したい。すなわち，結論に対立するものとして「父も兄も嫂も平岡も」があげられている。さらに表現上の特徴に注目すると，「賽を手に持つ以上は，又賽が投げられ可く作られたる以上は」という形で「以上は」を繰り返す反復法によって言葉に厚みを出し，さらに「～以外にあらう筈はなかつた」という変則的な二重否定によって決断が強調されている。

そして代助はようやく「縁談を断る」という結論

に到達する。

（ケ）

一番仕舞に，結婚は道徳の形式に於て，自分と三千代を遮断するが，道徳の内容に於て，何等の影響を二人の上に及ぼしさうもないと云ふ考が，段々代助の脳裏に勢力を得て来た。既に平岡に嫁いだ三千代に対して，こんな関係が起り得るならば，此上自分に既婚者の資格を与へたからと云つて，同様の関係が続かない訳には行かない。それを続かないと見るのはたゞ表向の沙汰で，心を束縛する事の出来ない形式は，いくら重ねても苦痛を増す許である。と云ふのが代助の論法であつた。代助は縁談を断るより外に道はなくなつた。

ここでも二分法を経て最終的な結論が出されている。すなわち，三千代を奪うか否かを「道徳の内容」と「道徳の形式」という選択肢に置き替えた上で，三千代を奪う，すなわち「縁談を断る」結論が選ばれる。形式と内容を比較すれば，多くの場合重要なのは内容の方だから，この形で二つが対立すれば，三千代を奪うという選択肢が重みを持つことになる。代助は一週間かけて，縁談と三千代の問題を「形式」か「内容」かという選択肢に置き換えたのである。

二分法には二つの選択肢しか存在しないから，一旦，一方の選択肢に大きく傾くと，そのバランスは簡単には動かない。この後，代助は自分の決意の強さに自分自身で驚いている。

（コ）

代助は凡てと戦ふ覚悟をした。

彼は自分で自分の勇気と胆力に驚ろいた。彼は今日迄，熱烈を厭ふ，危きに近寄り得ぬ，勝負事を好まぬ，用心深い，太平の好紳士と自分を見做してゐた。徳義上重大な意味の卑怯はまだ犯した事がないけれども，臆病と云ふ自覚はどうしても彼の心から取り去る事が出来なかつた。

彼が「自分の勇気と胆力に驚ろいた」のは，自分にそんな決断ができるとは思っていなかったからである。二つの選択肢の間に明らかな差が生まれた結果であるが，重要な問題において選択肢が一方に傾く経験は代助にとって初めてだったのだろう。

3．代助の思考の癖（2）：データ選択における偏り

三千代と再会した当初，代助は三千代に対する恋愛感情を自覚することができなかった。三千代に対する代助の気持ちはある瞬間に大きく変化する。それは代助が三千代の家を訪れ，父から三千代に宛てた手紙を読んだ直後である。その気持ちは次のように書かれている。

（サ）

代助は二人の過去を順次に溯ぼつて見て，いづれの断面にも，二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかつた。

既に指摘してきた「愛の炎」が出てくる箇所である。短く抽象的に書かれているが，この部分は重要である。「愛の炎」という強い表現，「見出さない事はなかった」という二重否定による強調（緩叙法）が行われているのは，二人の過去の「発見」が代助にとって重要な意味を持っていたからである。この「発見」は代助にとって衝撃であった。その衝撃の様子は次のように書かれている。

（シ）

必竟は，三千代が平岡に嫁ぐ前，既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だと考へ詰めた時，彼は堪えがたき重いものを，胸の中に投げ込まれた。彼は其重量の為に，足がふらついた。家に帰つた時，門野が，

「大変顔の色が悪い様ですね，何うかなさいましたか」と聞いた。代助は風呂場へ行つて，蒼い額から奇麗に汗を拭き取つた。さうして，長く延び過ぎた髪を冷水に浸した。

それから二日程代助は全く外出しなかつた。三日目の午後，電車に乗つて，平岡を新聞社に尋ねた。彼は平岡に逢つて，三千代の為に充分話をする決心であつた。

この「発見」に大きな衝撃を受けたのは，そこに三千代の「略奪」を決断させる重みを直感したからに違いない。その衝撃に代助は「足がふらつ」いてしまう。そして「三日目の午後」，代助は平岡を新聞社に尋ね，三千代を譲って欲しいという気持ちを直接伝える。三千代との「愛の炎」の発見がいかに

大きな意味を持っていたかが分かる。

では，この「発見」が代助の気持ちを一気に変えてしまったのはなぜか。その背景にあるのも，代助の思考の癖である。ただし，この癖は二分法ではない。二分法という癖は思考の形式面における癖だが，ここでの背景にあるのは，思考におけるデータ選択の傾向である。推論の手がかりに過去の事実を使わないという傾向がそれであり，この傾向は三千代について考える時に顕著に表れる。代助は，三千代との過去を完全に忘れてしまっていた節すらある。だから，二人の過去の事実が想起された時，代助は新鮮な衝撃を受けたのである。

先ほど引用した（エ）の例でこの傾向を確認してみたい。

（エ）

代助はもう一返嫂に相談して，此間の金を調達する工面をして見やうかと思つた。又三千代に逢つて，もう少し立ち入つた事情を委しく聞いて見やうかと思つた。

けれども，平岡へ行つた所で，三千代が無暗に洗ひ浚い饒舌り散らす女ではなし，よしんば何うして，そんな金が要る様になつたかの事情を，詳しく聞き得たにした所で，夫婦の腹の中なんぞは容易に探られる訳のものではない。

代助と平岡は昔からの親友で，三千代を平岡に斡旋したのは代助である。つまり，三千代と平岡の人となりについて，代助は少なからぬ情報を持っていたことになる。しかも，平岡の借金が，部下の使い込みの穴埋めのためであることを，代助は平岡から直接聞いているから，平岡については性格ばかりでなく，経済面についての情報もある。だが代助は，それらの情報を全く使うことなく，平岡夫婦の経済状態を推測している。これは三千代についても同様である。代助は三千代から借金の依頼を受けているのに，その時の三千代の言葉や様子を，全く手がかりにしていないからである。過去についてのデータがあっても，推論においてそれを使用しない傾向が見て取れる。

類例をもう一つあげてみよう。次の例は自分の結婚問題について父から追求される場面である。

（ス）

代助は次に，独立の出来る丈の財産が欲しくはないかと聞かれた。代助は無論欲しいと答へた。すると，父が，では佐川の娘を貰つたら好からうと云ふ条件を付けた。其財産は佐川の娘が持つて来るのか，又は父が呉れるのか甚だ曖昧であつた。代助は少し其点に向つて進んで見たが，遂に要領を得なかつた。けれども，それを突き留める必要がないと考へて已めた。

次に，一層洋行する気はないかと云はれた。代助は好いでせうと云つて賛成した。けれども，これにも，矢っ張り結婚が先決問題として出て来た。

代助は財産を譲るという父の提案について，その財産の出所を考えるが，それを考えるに当たって，父のこれまでの言動を手がかりにしていない。また，「洋行する気はないか」という問いに対しても，洋行に関連するこれまでの経験や知識を参照することなく，「好いでせう」という結論を出す。

代助には，思考のデータとして過去の経験あるいは知識を使わない傾向がある。ただしこの傾向は絶対的なものではなく，例えば最初に引用した（ア）では，兄の過去の行動が推論の手がかりとして参照されている。だが，三千代に関する推論においては，過去の事実を手がかりにしない傾向が顕著に表れるのである。

不思議なことに，代助が三千代との過去をほとんど思い出せないからである。次節では，過去の記憶という点から代助と三千代との関係を考えてみたい。

4．過去を呼び起こす存在としての三千代

三千代は代助に過去を思い起こさせる存在である。三千代は様々な形で代助に過去を想起させ続け，その積み重ねとして，あの「恋の炎」の記憶が代助に蘇るのである。

彼女は物語に登場する時，いつも代助に過去を想起させるアイテムを身に付けている。それは，真珠の指輪，髪型（銀杏返），白い百合の花，父からの手紙などである。これらのアイテムは代助に過去を想起させる媒体である。次の用例は三千代が結婚後初めて代助を訪れる場面である。

（セ）

廊下伝ひに坐敷へ案内された三千代は今代助の前に腰を掛けた。さうして奇麗な手を膝の上に畳ねた。下にした手にも指輪を穿めてゐる。上にした手にも指輪を穿めてゐる。上のは細い金の枠に比較的大きな真珠を盛つた当世風のもので，三年前結婚の御祝として代助から贈られたものである。

この時三千代は，代助から贈られた指輪をはめていたが，彼女の指輪は一つではない。もう一つの指輪はおそらく結婚指輪か婚約指輪であろう。ここで重要なのは，代助の指輪の方が上に置かれていることで，ここには代助に対する三千代の好意が読み取れる。「下にした手にも指輪を穿めてゐる。上にした手にも指輪を穿めてゐる」と同じ形の文が反復されていることで，この二つの文はスポットライトが当たったような強い印象を残す。代助は指輪の位置関係に気付き，その事実に少なからぬ意味を見出したから，このように目を引く表現で叙述されているのだろう。

三千代はこの後，お金を都合してくれたお礼を言うために代助の家を再び訪れる。この時，三千代は百合の花をわざわざ買って持参している。三千代がまだ兄と清水町に住んでいた時，二人の家を尋ねた代助が百合の花を持参したことがあったからである。三千代はその時のことを思い出して，百合を持参したのである。さらに，この時の彼女は代助と初めて出会った時の髪型である銀杏返に結っていた。だが，代助には百合の花の意味が理解できず，髪型にも無反応である。この場面を次に引用する。

（ソ）

「此花は何うしたんです。買て来たんですか」と聞いた。三千代は黙つて首肯いた。さうして，「好い香でせう」と云つて，自分の鼻を，瓣の傍迄持つて来て，ふんと嗅いで見せた。代助は思はず足を真直に踏ん張つて，身を後の方へ反らした。

「さう傍で嗅いぢや不可ない」

「あら何故」

「何故つて理由もないんだが，不可ない」

代助は少し眉をひそめた。三千代は顔をもとの位地に戻した。

「貴方，此花，御嫌なの？」

代助は椅子の足を斜に立てゝ，身体を後へ伸した儘，答へをせずに，微笑して見せた。

「ぢや，買つて来なくつても好かつたのに。詰らないわ，回り路をして。御負に雨に降られ損なつて，息を切らして」

代助は百合の花にも銀杏返しの髪にも全く反応しない。この時の代助は三千代とのエピソードを思い出せないのだ。三千代はそんな代助に落胆するが，次のように言って苦笑する。

（タ）

「貴方だつて，鼻を着けて嗅いで入らしつたぢやありませんか」と云つた。代助はそんな事があつた様にも思つて，仕方なしに苦笑した

代助は三千代のこの言葉を聞いても，過去を思い出さないばかりか，思いだす努力もしていない。彼が過去に価値を感じていないからだろう。だが，この後，過去に対する代助の考え方に大きな変化が訪れる。そのきっかけとなったのが，三千代の父からの手紙である。この手紙は三千代の父が自分の苦しい境遇を伝えるものであり，三千代は夫の平岡にもこの手紙を伏せていた。

（チ）

手紙には向ふの思はしくない事や，物価の高くて活計にくい事や，親類も縁者もなくて心細い事や，東京の方へ出たいが都合はつくまいかと云ふ事や，――凡て憐れな事ばかり書いてあつた。代助は叮嚀に手紙を巻き返して，三千代に渡した。其時三千代は眼の中に涙を溜めてゐた。

三千代の父はかつて多少の財産と称へらるべき田畠の所有者であつた。日露戦争の当時，人の勧に応じて，株に手を出して全く遣り損なつてから，潔よく祖先の地を売り払つて，北海道へ渡つたのである。其後の消息は，代助も今此手紙を見せられる迄一向知らなかつた。親類はあれども無きが如しだとは三千代の兄が生きてゐる時分よく代助に語つた言葉であつた。果して三千代は，父と平岡ばかりを便に生きてゐた。

この手紙によって平岡にも明かさなかった三千代の境遇を知り，さらに彼女の涙を見たことで，代助と三千代との距離は一気に縮まる。その時の親密な距離感は「その時代助は三千代と差向かひで，より長

く坐つてゐる事の危険に，始めて気が付いた」と書かれている。代助が二人の「愛の炎」を想起するのはこの直後である。その部分を再び引用してみよう。

（サ）

代助は二人の過去を順次に溯ぼつて見て，いづれの断面にも，二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかつた。

この直後，代助が三千代を「略奪」する意志を固めたことは既に確認した通りである。代助に「略奪」を決意させたものは三千代との記憶である。それは，三千代に自分の本心を打ち明ける代助が，二人の過去に強いこだわりを持っている点からも確認できる。次の引用は，告白のために三千代を呼び出した代助が，百合の話をする場面である。この時代助は，百合の花を買い求めて部屋に活けている。百合の香を話題にしたことをきっかけに，代助は二人の過去を再現していく。

（ツ）

「兄さんと貴方と清水町にゐた時分の事を思ひ出さうと思つて，成るべく沢山買つて来ました」と代助が云つた。

「好い香ですこと」と三千代は翻がへる様に綻びた大きな花瓣を眺めてゐたが，夫から眼を放して代助に移した時，ぽうと頬を薄赤くした。

「あの時分の事を考へると」と半分云つて已めた。

「覚えてゐますか」

「覚えてゐますわ」

「貴方は派手な半襟を掛けて，銀杏返しに結つてゐましたね」

「だつて，東京へ来立だつたんですもの。ぢき已めて仕舞つたわ」

「此間百合の花を持つて来て下さつた時も，銀杏返しぢやなかつたですか」

「あら，気が付いて。あれは，あの時限なのよ」

「あの時はあんな髷に結ひ度なつたんですか」

「えゝ，気迷れに一寸結つて見たかつたの」

「僕はあの髷を見て，昔を思ひ出した」

「さう」と三千代は恥づかしさうに肯つた。

そして，代助は告白のクライマックスの場面で，自分が以前の自分と変わっていないことを強調する。

（テ）

「僕は，あの時も今も，少しも違つてゐやしないのです」と答へた儘，猶しばらくは眼を相手から離さなかつた。三千代は忽ち視線を外らした。さうして，半ば独り言の様に，

「だつて，あの時から，もう違つてゐらしつたんですもの」と云つた。

三千代の言葉は普通の談話としては余りに声が低過た。代助は消えて行く影を踏まへる如くに，すぐ其尾を捕えた。

「違やしません。貴方にはたゞ左様見える丈です。左様見えたつて仕方がないが，それは僻目だ」

（中略）

「僕の存在には貴方が必要だ。だうしても必要だ。僕はそれだけのことを話したい為にわざわざ貴方を呼んだのです」

二人のやりとりでは，代助が別人になったか否かがポイントになっている。代助にとって過去の自分を取り戻すことは，三千代を愛することに他ならならない。だから彼は，過去の自分と変わらないこと，過去の自分を取り戻したことを強調するのである。

5．まとめ

本稿の目的は，『それから』の表現に注目することによって，『それから』の解釈に一石を投じる発見を提出することであった。本稿の結論は課題設定において既に予告したとおりである。ポイントを再度引用してみよう。

(1) 代助の決断の背景には，二者択一という思考の癖が存在している。(2) 代助は推論の手がかりに過去の事実を使わない傾向がある。(3) 代助にとって三千代は過去を呼び覚ます存在である。

それまで決断のできなかった代助が，なぜ三千代の「略奪」という大胆な行動を決意したのか。これは『それから』の解釈における重要問題であり，本稿は代助の思考の癖からその背景を明らかにした。その第一は二者択一という思考の癖であり，これによって優柔不断でありながら大胆に振舞った背景が説明できる。代助の振舞いは極端とも見えるが，それは二つの選択肢が釣り合うか，一方に傾くかの違いであったと考えられる。

そしてもう一つは，過去を思い出さない，あるいは過去を重視しないという思考の傾向である。三千代

は，真珠の指輪，髪型（銀杏返），白い百合などのアイテムを身にまとい，代助を刺激することで，自分との過去を徐々に想起させていく。そして，「愛の炎」を確認した時，代助は三千代の「略奪」を決意する。過去に価値を置かず，過去の出来事を忘れてしまう代助にとって，二人の間に「愛の炎」が途切れずに存在していた事実は衝撃的であり，その衝撃が「略奪」を決意させるのである。『それから』は，三千代が代助に過去を想起させる物語とまとめることもできるはずである。

では，代助が三千代との過去を忘れてしまったのはなぜだろう。いや，代助が二人の間にあった「愛の炎」を忘れてしまったというのは，おそらく正確ではない。その当時の代助は「愛の炎」に全く気付いていなかったと考えられるからである。当時の代助は，自分に対する三千代の気持ちに気付かず，三千代に対する自分の気持ちも自覚することができなかった。当時の彼は，三千代に無関心だったからである。だが，代助は，経済的に追い詰められた三千代を本気で救おうとし，三千代の夫婦関係を疑いの目を持って考えるようになる。三千代に対するそんな真剣な姿勢が，覆い隠されていた「愛の炎」を自覚させていったのだろう。

三千代は確かに過去を呼び起こす存在であるが，代助は単に忘れていた過去を思い出したのではない。見落としていた重要な事実を自覚したのである。三千代が過去を想起させる存在であることは間違いない。ただし，彼女が想起させるのは代助自身が自覚していない過去である。彼女は「正しい」過去を教える存在と言うべきかもしれない。

女性に対する自分の恋愛感情を自覚できない鈍感な登場人物を，漱石は他の作品でも描いている。それは『こころ』のKである。Kは静を強く愛していながら，その気持ちをなかなか自覚することができない鈍感な男である[3]。三角関係を始めとして，漱石は同じモチーフを繰り返して描く作家である。『それから』と『こころ』でも女性に対する気持ちを自覚できない，自覚するまでに時間のかかる男を描いたのではないだろうか。

注

1）香西秀信『修辞的思考　論理でとらえきれぬもの』，明治図書，1988年。長尾高明氏の研究も本書に詳しく紹介されている。

2）Weaver, M. Richard, “Language is Sermonic”, 1962 (Reprinted in Richard L. Johansen ed. *Contemporary Theories of Rhetoric: Selected Reading* (New York, 1971)
ウィーバーのこのアイデアについては香西氏の上記の文献でも詳しく紹介されている。

3）柳澤浩哉『『こころ』の真相　漱石は何をたくらんだのか』新典社，2013年，pp.84-92